

ヨソ者の目線

能登の里山里海が学びの場に。

近年、小木地区や岩井戸地区などで、地域活性化をテーマに学ぶ大学生を受け入れている。学生たちは能登の暮らしから何を感じたのか。ゼミ合宿で今年9月の3日間、岩井戸地区に滞在した東洋大学生の感想を紹介したい。



東洋大学国際地域学部
井上真里奈さん

能登ゼミで一番感じたことは、人の温かさや優しさでした。能登の一番の資源はモノではなくヒトだということを実感しました。炭焼きの小箱さん、猿鬼伝説の向峠さん、農作業の尻田さん、山せみ荘のおばあちゃんたちから、たくさんのお話を学ぶことができました。民泊させていただいた首田さんからは「能登はもう君のふるさとだから、またいつでもおいで」と言われ本当にうれしかったです。地に足を着けた生き方、地域のつながり、伝統のお祭りやのんびりとした雰囲気は都会には絶対ないものだと思います。ヒトとヒトのつながりの大切さ、心の大切さを能登で学びました。私も自分の心と正直に向き合い、挑戦していきたいと思います。大好きな能登に必ずまた来ます。



東洋大学国際地域学部
板井靖良さん

岩井戸地区で3日間過ごしました。一見すると風光明媚な田舎というだけの印象だったかもしれませんが。しかし、一日一日とさまざまな体験をし、地元の方々のお話を聞くことで、岩井戸地区がどれだけ美しく、凛としていた場所なのか見えてきました。最後には見る風景全てに意味を感じ、お世話になった方の顔が浮かんできました。

自然の美しさと人の美しさの相関関係がはつきりと分かりました。能登の自然の中で、地元の方の姿を通して、私たちは自然への敬意、慈しみ、そして愛を感じました。

能登には本物の自然と人の温かさが確かに存在し、絶妙な相関関係で「能登」であることを保っているのだと実感しています。本当に有意義で素晴らしい経験でした。

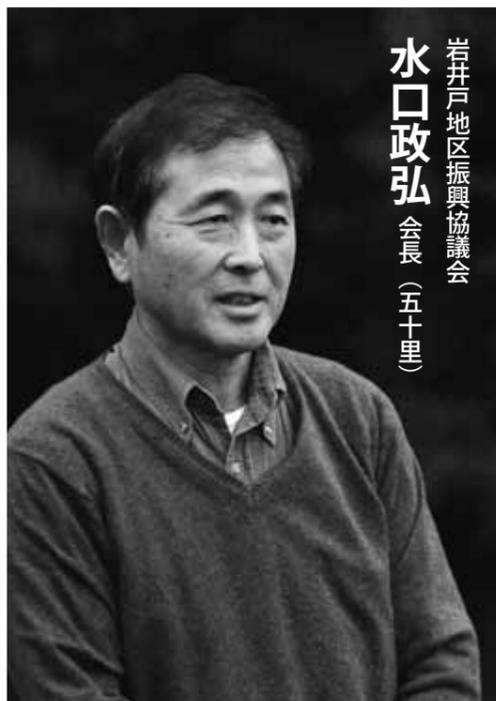


東洋大学国際地域学部
石井美樹さん

初めての能登。行くまでは「どこにでもある田舎」くらいにしか考えていませんでしたが、東京に帰ってくるのが180度変わっていることに自分でも驚いています。

地元の皆さんの話を聞いて、今まで忘れていた家族の温かさや食べること、生きることのありがたみを感じる事ができました。一度離れても、また戻ってきたいと思えるふるさとがある能登の人をうらやましくも思いました。

能登の良さを地域の人たちに伝えること、若い力を必要とするこの場所に多くの若者を連れ込む手助けをすることが私たちの役目であり、この合宿をきっかけに能登についてもっと知りたいと思うようになりました。私の気持ちに変化を与えた能登と能登の皆さんに感謝しています。



岩井戸地区振興協議会
水口政弘 会長（五十里）

能登は生まれ育った場所ですが、若いときはずっと「逃げたい」と思っていました。それでも能登で生きていくことを選択し、今は育ててもらった地域に恩返ししたいと思っています。大学生はいろいろな角度から地域を見てくれて、私たちが今まで当たり前だと思っていた「地域の良さ」を教えてくださいました。世界農業遺産の認定や大学生の受け入れは、地域を見直すきっかけになりました。何も無いながらも、集落はこれまで脈々と続いてきました。何もせずに見ているだけではなく、何かできることはないか地域の皆さんと模索していければと考えています。

里山里海の地域資源

【棚田・谷地田】

棚田は山地などの傾斜地に階段状に作られた田んぼ。谷地田は台地に挟まれた細長い谷にある田んぼ。棚田は農作業の機械化が難しく、耕作放棄地になりやすいが、水源に近く昼夜の寒暖差が大きいため、米の食味が増す条件に恵まれる。

さらに生き物を育み、水を蓄え、地滑りを防ぐなど多面的役割も担う。

未来への糸口

世界農業遺産に認定されても、過疎化や高齢化は止まらない。地域の宝物を守るために何をすれば良いのか。農業遺産の認定前から活動する地域の事例から、解決の糸口を探る。

地域で「あえのこと」を受け継ぐ 国重田の神様保存会

農家が家々で執り行う神事「あえのこと」。近年は農業の近代化や後継者不足などが原因で、神事を行う農家は激減している。



国重地区は、地域であえのことを復活させようと平成20年に保存会を結成。吉村安弘会長宅に保存会員が集まり、協力しながらあえのことを執行している。きっかけはユネスコ無形文化遺産の登録。それぞれの記憶や資料をひもときながらも、時代に合わせた形になるよう相談しながら準備を進めた。地域であえのことを保存・伝承する活動は、神野地区など他の地域にも広がっている。

オーナー制で棚田を存続させる 白米千枚田（輪島市）

千枚を超える大小の田んぼが美しい幾何学模様を描く千枚田。かつて18軒を数えた農家は3軒を残すのみとなり、年々休耕田が増え続けていた。



「千枚田を守りたい」。平成3年に50人で始まった耕作ボランティアは、400人を超えるまでになった。平成19年からは「マイ田んぼ」として全国からオーナーを募集。会費と年数回の現地作業が必要だが、多くの人が観光を兼ねて輪島を訪れている。千枚田を守り未来に残すためには、農家とボランティア、そして観光客のいずれも欠かすことができない。

限界集落に『若者』という血流を 神子原地区（羽咋市）



▲棚田を利用した巨大ひな壇は大学生のアイデアで6年前に始まった。二日間で1500人以上が訪れる。

富山県との県境に位置する羽咋市神子原地区。なかでも菅池町は、さらに山手にある農村集落。羽咋市は、限界集落といわれたこの集落を活性化させるため、烏帽子親農家制度、空き農家・

農地情報バンク制度、神子原米のブランド化計画、首都圏大学生による援農合宿一などを実施。高齢化率が高く、離村率も激しい農村集落に『若者』という血流を与えることで、限界集落を見事に脱却した。

神子原地区次の一手は“自然栽培農法（Japonic）”。『奇跡のリンゴ』で知られる木村秋則さん（青森県・木村興産社代表）が提唱する農薬、除草剤、肥料を一切使わない農法の普及に取り組んでいる。

ローマ法王にも献上され、ブランド米として確立した『神子原米』の販路はアメリカやフランスへと広がっている。世界農業遺産の追い風を受けて、限界集落の挑戦は世界に向けてさらに加速している。

キリコ祭りに大学生を受け入れる 柳田大祭



過疎高齢化によりキリコの担ぎ手が不足している「柳田大祭」。柳田地区は平成21年から金沢星稜大学の応援を得て、祭りの継承に取り組んでいる。

今年の祭りからは女子学生も参加。親戚や友人を招待して供応する「よばれ」を手伝った。民泊も取り入れた結果、学生と地域住民との交流がさらに深まっている。学生たちは祭りの準備や運営に参加することで住民とふれ合い、地域への理解を深めようと考えている。学生たちの思いを取り入れながら、祭り存続の道が模索されている。

【のぎんまツツジ】
能登半島は古木の群生地として日本の規模を誇る。特徴は民家の軒先や裏庭にあること。数百年にわたって人が手をかけ続けた結果であり、まさに能登の暮らしと共にある花木。NPO法人のとぎりシマツツジの郷は、500本を超える古木を調査し「深紅の戸籍簿」を制作中。開花は5月上旬から中旬ごろ。



佐渡の伝統文化



【鬼太鼓（おんでこ）】

鬼太鼓は佐渡各地のお祭りに登場。豊作や大漁、家内安全を祈願し、厄を払うために家々を回る。鬼の舞い方や太鼓の叩き方は、地域によりさまざま。



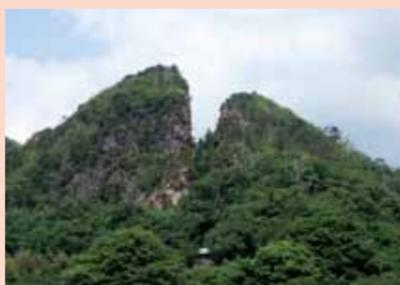
【車田植（くるまだうえ）】

佐渡市北鷗島（きたうしま）の北村家に残る習俗。3人の早乙女が田の中央に苗を植えた後、車状に外側へ後ずさりながら丸く苗を植えていく。田の神に豊作を祈る農耕儀礼。



【薪能（たきぎのう）】

佐渡には30以上の能舞台が残り、初夏には各地の能舞台で薪能が奉納される。佐渡の能はその地域に暮らす人々が舞い、謡い、観ることが最大の特徴。



【道遊の割戸（どうゆうのわりと）】

地表に出ている金銀鉱脈を掘り取った結果、山が真二つに割れてしまった日本最大の露天掘り（露天掘り）の跡で、相川金銀山を象徴する奇観。

「能登の里山里海」と共に世界農業遺産に認定された「トキと共生する佐渡の里山」。トキが棲める豊かな生態系と美しい里山を未来に継承する佐渡の取り組みを佐渡市農林水産課長、渡辺竜五さんに聞いた。

朱鷺と暮らす郷づくり

平成20年、野生復帰を目指して10羽のトキが佐渡の空に放たれた。トキとの共生を掲げる佐渡市は、トキのエサ場の確保と佐渡米のブランド化を目指して『生きものを育む農法※1』の普及に取り組み、『朱鷺と暮らす郷』認証米制度※2を創設した。

「佐渡米は平成16年の台風被害により、産地として信頼を失い、平成19年まで販売不振が続きました。結果として生産調整の強化と米も売れなくなるという厳しい状態が重なり、耕作放棄地が増えていきました」と当時の佐渡米の状況を振り返る渡辺さん。トキの餌場についても整備が進んでいないと感じていた。

「トキは里山の鳥で、平野部の生きものの少ないほ場整



佐渡リポート

トキと共生する佐渡の里山

備した田んぼも重要なエサ場です。この田んぼに生き物を増やすことができれば、佐渡の生態系の頂点にいるトキも増えます。逆にトキが死ねば佐渡のイメージが悪くなります。トキを生かすのは、農家の腕にかかっていたのです。当初、農家からは『俺には関係ない』という意見が多く、なかなか理解してもらえませんでした。トキのエサ場をつくることで米が高く売れる。トキのためではなく、農家のためだと説明しました。初年度の参加は少ないと考えていましたが、数軒の農家がやってみようと声を上げて地域でPRを始めた結果、初年度から256戸427畝でスタートしました。

一つの狭いエリアではなく、佐渡全体の生き物を少しずつ増やそうと考えています。が減ってくるのです。新潟県と一緒に技術的な検証をしていますが、有機にすればするほど土づくりや施肥のタイミングなど技術が必要になります。稲の状態をしっかりと見るなど農業の原点に戻ることが大切なのだと感じています」

農業を継がせたい職業に

世界農業遺産認定を受けて佐渡の取り組みに変化があったのだろうか。

「認証米は主に平野部のほ場整備された田んぼで作られています。農業遺産の認定は、これまで平野部を見ていた私たちの目を『棚田』に向けさせてくれました。平野部と中

山間地はつながっています。認定を機に『棚田協議会』を設立し、棚田を守ることが集落を守ること、佐渡の農業を守ることにつながると農家に訴えています。

佐渡の農業を守るためには、農業が子どもに継がせたい職業である必要があります。そのためにも、農業遺産を活用したブランド化をさらに進め、農家の収入を増やしたいと考えています」

佐渡と能登

「佐渡の農業はすごいと言われますが、私は能登に驚いています。食、地形、地名、文化など資源がとても豊かで

4市4町ごとにそれぞれ特徴があります。都会とのつながりも佐渡の目標とすべきものです。

私が能登の皆さんに意識してほしいと思うことは『能登は能登としか見られていない』ということです。4市4町が連携して『能登』の魅力を高めてほしいと思います。能登と佐渡が共に頑張つて、農業・文化が日本にとって大切なものであることを発信していきたいでしょう」

北前船が往来した海運の時代、人的にも物的にも交流が盛んだった佐渡と能登が、時代を経て再び交わった。同じ「世界農業遺産」として。



佐渡市農林水産課
渡辺竜五 課長

※1「生きものを育む農法」…生物多様性を確保するため①水田や水路に江（深み）を設置②ふゆみずたんぼ（冬期湛水）③ビオトープの設置④魚道の設置—の4つの取り組みを行う農法

※2「朱鷺と暮らす郷」認証米制度…①生きものを育む農法で栽培②年2回の生きもの調査③農業・化学肥料を地域慣行比5割以上減らす④エコファーマーの認定⑤佐渡で栽培された米—という基準をクリアしたお米を佐渡市が認証する制度



自治体の役割

「能登の里山里海」を次世代に受け継ぐという長期的な目的を考えると、自治体の果たす役割は大きい。世界農業遺産を地域活性化にどうつなげるのか。伝統文化や景観をどうやって守っていくのか。持木一茂町長の考えを聞いた。

—世界農業遺産への認定をどのように感じているか。

能登の原風景、昔ながらの農法、祭りなどの文化が総合的に評価され、世界に認められた。認定はうれしいことであるが、しっかりと守っていくという大変な部分もある。

—自治体の役割は。

認定を機に交流人口の拡大につなげていきたい。能登町には千枚田のような象徴的風景はないが、春蘭の里やあえあばれ祭などの多彩な祭りがある。能登町に来てもらって体験してもらうために、この町に何があり、何をやっていくのかというPRをしっかりとやっていきたい。

今年も首都圏でモニターを募集してツアーを実施した。モニターからは、都会の人が求めるものと地元のギャップを埋めるためのさまざまな意見をいただいた。こうした外の意見も積極的に聞いて、参考にしていきたい。



久田和紙の紙すき

は住民活動の支援。伝統文化の保存継承や農林水産業の課題など、地元の声をしっかりと聞いて活動を応援していきたいと考えている。

—地域や住民の意識は。

認定されたからといって特別変わったことをする必要はない。これまでやってきたことを続けていくことが大切だ。ただ、意識の中では「世界農業遺産を守る」ということを常に考えてほしい。

認定をきっかけに地域を見つめ直したり、活動が広がっている団体も出てきている。例えば久田和紙は、原料となるコウゾを植栽して増やす事業に乗り出した。これまでであれば高齢化で山に自生するコウゾの採集をあきらめ、活動は収縮していたかもしれない。

い。地域の宝である久田和紙を守りたいという意識から新しいアイデアが生まれた。一人一人の意識が変われば、能登はもっとすばらしい場所になる。自分に何ができるか、地域で何ができるかということは、これまでとは違う「世界農業遺産」という視点で考えれば見えてくるのではないか。

—能登の未来は。

このまま何もやらなければ能登が廃れてしまうという危機意識は、私も含めて多くの人が持っている。「世界農業遺産」は私たち能登の人間の意識を「否定から肯定」「マイナスからプラス」に変える大きなきっかけだ。

明るく元気に、能登を誇りに思いながら暮らせるまちづくりのために、住民も地域も行政も一歩前に進みたい。能登の未来を担うのは子どもたちだ。わたしたち大人が、子どもたちに前向きに生きる背中を見せることが、能登の未来につながっていく。

一人一人の意識が変われば
能登はもっとすばらしい
場所になる。

里山里海の地域資源

【あばれ祭・キリコ祭り】
7月から10月にかけて、能登半島各地で開催される「キリコ祭り」。高さ数メートルから十数メートルのキリコ（切り灯籠）を担ぎ、豊作や豊漁、疫病退散などを祈願する。

宇出津のキリコ祭りは「あばれ祭」と呼ばれ、40数本のキリコが大松明の周りを乱舞し、2基の神輿が川や火の中に投げ込まれて大暴れする。

能登町長

持木一茂



能登の暮らし

世界農業遺産「能登の里山里海」で暮らす私たち。

能登の未来のために、私たちがができることは何なのか。

能登に移住して44年。能登を愛し、能登を知るスペシャ

リスト・藤平朝雄さんからのメッセージ。

移 住者である私は、「なぜ能登が良いのか」とよく問われます。「44年間能登で生活してきたこと」がその答えです。私は能登が良いと思っ

ているから能登に住み続けています。44年住んでも分らないことだらけ。能登の懐の深さを感じています。

能登半島は神仏と祖霊と自然と生活の場が区分けなく、ごちやごちやに入り交じっている地域です。この多様な暮らしの文化が、人々の営みの中でほどよく良く絡み合っている風土が能登なのです。

そんな能登が「世界農業遺産」という国連のお墨付きをもらいました。能登には遺産

として次世代に伝えていく「何か」が確かにあるということ

です。しかし、認定から1年半が経過し、PR看板やポスター、パンフレットばかりが増えました。現状は、認定による交流人口拡大という「速効性」ばかりに目が行っているような気がします。経済が疲弊している能登において「速効性」も大切ですが、世界農業遺産は「生きている遺産」であり、漢方薬のように後から効いてくる「遅効性」の取り組みも忘れてはいけません。

世界農業遺産という看板を掲げるだけで人は来ません。能登を自慢するだけでは活

化しません。先進国初の認定に賞味期限はないのです。あせらずに、地域の良さに磨きをかけることが大切です。

例えば、誰も訪れなくても景観をより良くしようと努力する地域があります。その地域は、誰もポイ捨てをしないし、ゴミが落ちていけば見えて見ぬふりはしません。地域の景観は住民の心を映し出す「鏡」。その地域は、住民の濁りのない美しい心が景観に表れています。

自 分にできること、地域でできること、能登全体でできることがあります。能登に住む私たちは、「誰かがやって

くれる」ではなく「自分でできること」を考えましょう。みんながそれぞれできることをやれば、きっと大きな力になります。

このまま何もしなければ、能登は廃れるだけです。集落に限界があるように地域にも限界があります。みんな地域を良くしていくと努力を重ねて活性化するのが先か、能登が疲弊してしまうのが先か。現状で良いという考えは誤りです。

私 たち年寄りには大きな役割が二つあります。一つは、これから頑張ろうとする若者を支えるということ。否定ではなく、見守るでもなく「支える」です。能登の未来を担い、日本や世界に目を向ける若者の背中を年寄りが押してあげてください。

もう一つが、子どもたちにこの土地の良さを伝えていくことです。能登の暮らしを体で覚えた子どもたちは、都会に出ても能登を語ることができます。認定をきっかけに、能登の人がもっと能登を知

り、子どもたちに自分たちの暮らしや自然に逆らわず生きてきた知恵を伝えてほしいと思います。

農 林水産業も、景観も、伝統文化も、伝えていくのは「人」です。祈りと感謝を忘れずに、こころ豊かに、明るく、上機嫌で明日への一歩を踏み出しましょう。

世界農業遺産に認められるような、能登に生きる「幸せ」を感じながら暮らしていきたいでしょう。

能登に住んでいる『幸せ』を感じながら暮らしたい。

藤平朝雄さん
(石川県観光スペシャルガイド)

【ふじひら・あさお】

東京都出身。能登に魅せられ昭和44年に輪島市へ移住。キリコ会館初代館長などを歴任し、現在は石川県観光スペシャルガイド。自らの経験を基に能登の魅力を県内外に発信している。輪島市町野町在住、73歳。



能登の里山海。
わたしたちも

※過去に広報で撮影した写真
のほか山崎昭宏さん提供